

現地通信

前田成文氏の組織する海域プロジェクトで、機会があって、サンゲアン島に行くことができた。これは、東インドネシアのスンバワ島の右肩に、ちょこんとくっついた火山ひとつだけの、芥子粒のような小島である。約300戸のサンゲアン人がひとつの塊村をなして住んでいて、畑で粟を作っている。陸稲も含めて、稲というものはない。彼らはこんな島住みだが漁業はほとんどやらない。だから周辺の人たちは、サンゲアンの人たちを自分たちとは違う農民だとして区別している。

この島の村長の家に泊めてもらった時、私は彼から島にある大きな水壺の話聞いた。

大昔、ふたりの兄弟があった。兄のサフィール・サンゴは弟に会いたいと思って、西に向けて航海していた。弟のサフィール・ゲディは兄に会いたいと思って、東に向けて航海していた。2艘の船はフローレス島の近くで出会うと、おたがいに戦争を始めた。2艘の船は沈んで、ふたりの兄弟だけが生き残った。そこで弟は兄に向かっていった。「もしお前が私の兄なら、私の乗客をみんな生き返らせてみる。」すると、サフィール・サンゴは弟の積んできた鹿をすべて生き返らせた。今度は兄がサフィール・ゲディに向けていった。「もしお前が私の弟なら、私の乗客をみんな生き返らせてみる。」すると、サフィール・ゲディは兄の積んできた豚をすべて元の通りに生き返らせた。2艘の船も海底から上がってきたが、それは合して、ひとつの島になった。それがサンゲアン島である。島には鹿と豚しかいないのも、このためだ。2艘の船に積んであった水壺もそのまま残った。それで、サンゲアンには今も水壺が多いのである。

その夜、村長は、今も水壺をひとつだけ持っている、水壺は直径1mぐらいで、蛙の形をした脚が四

サンゲアン島にて

高谷好一*

つついている、と話した。とたんに私は、これはドンソン・ドラムに違いない、と気がつき、その夜は興奮でなかなか寝つかれなかった。

勉強不足の私は、このサンゲアン島が著名なドンソン・ドラムの出土地であることを知らないでここに来ていた。松本信広(『古代インドシナ稲作民宗教思想の研究』『インドシナ研究』1965. pp. 116-117所収)によると、ここからはすでに数個のドンソン・ドラムが報じられている。これらのドラムには、極めて多くの馬や象の紋様が描かれているということである。同書によると、ハイネ・ゲルデルンは紋様の一部に、中国風に跪座する人物像を発見して、そこに強い中国文化の影響を指摘しているという。松本氏自身も、3足の鳥に似た鳥人の乗る太陽舟らしいものを認め、ハイネ・ゲルデルンのいう中国の影響を肯定している。

村長の納戸にころがしてあった銅の水壺には、上面の星形紋様以外には、明瞭な絵は認められなかった。しかし、もし両先学がいうことが事実とすると、これは、われわれが普通にドンソン・ドラムとして知るところのものとは、かなり趣を異にするものである。ドンソン・ドラムといえば、私の理解では水牛を持った稲作民に結びついている。極端に言えば、そこには馬も象も中国風風俗もあっては具合が悪い。雲南に発し、紅河を下り、インドシナ半島から、マレーやジャワに展開してゆく稲作民を考え、それに付随する祭儀用具をドンソン・ドラムと私は考えている。ところが、ここではそれは、馬や象や鹿や豚と結びつき、航海用の水壺として理解されている。

インドネシアもバリ島より東になると、ぐっと大洋の香が強くなってくる。機会があったら、大洋に展開する稲作民という視点で、このあたりを調査してみたい。(京都大学東南アジア研究センター教授)

* Yoshikazu Takaya, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University